

「満足度向上に向けた観光モデル地域の創出・調査」
民族共生象徴空間（ウポポイ）活用に関する
調査報告書

令和2（2020）年3月

一般社団法人北海道商工会議所連合会

はじめに

北海道を訪れる観光入込客数は年々増加傾向にあり、2018年度は、5,520万人となりました。

しかしながら、道内の観光においては、観光客が道央圏に集中していることから地域の来道者数に偏りが見られます。

また、観光地間の移動に時間がかかることや、観光地へのアクセスに乗り継ぎの時間を考慮しなければならない公共交通機関の利便性など課題は山積しております。

加えて、2018年9月に発生した北海道胆振東部地震、ブラックアウトの際には、外国人観光客への情報発信不足など課題が浮き彫りとなり、災害時・緊急時対応の一刻も早い対策が必要となりました。

また、特に、本年（2020年）に入ってから、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、北海道の社会・経済全般に渡り大打撃を受け、基幹産業である観光業においては、本年2月の国際線の旅客輸送実績が前年同期より47%減少し、宿泊施設ではキャンセルが相次ぐなど、この状況が6月まで続けば本年上半期の観光消費額は前年同期より3,680億円減少すると試算されており、かつてない深刻な状況に陥っております。

一方、2021年には東京オリンピック・パラリンピックの開催、アジア初となる「アドベンチャー・トラベル・ワールド・サミット（ATWS）」の札幌開催や、2030年度には、北海道新幹線の札幌延伸が予定されております。

また、本年4月には白老町に民族共生象徴空間「ウポポイ」が開業予定であり、経済の先行き不安を払拭し、今後の北海道観光の未来を拓く千載一遇のチャンスであると期待しております。

この機会を逃すことなく、国内外の観光客に道内各地を訪れていただき、来道者の満足度向上やリピーターの増加に努め、一日も早く「稼ぐ観光」を実現することが、北海道経済の早期回復に繋がって参ります。

本連合会と致しましても、北海道観光の発展に向け、鋭意事業に取り組んで参る所存です。

本報告書は、こうした状況を踏まえ、来道者の満足度向上に向けた地域の取り組みを促進するため、札幌国際大学 宮武 清志教授、千葉 里美准教授の協力により、モデル地域としてウポポイが開業する白老町、周辺地域である登別市・苫小牧市の地域資源や公共交通機関の課題、今後の災害時・緊急時対応等の調査（2019年10月～2019年11月）結果を取り纏めたものです。

本報告書が北海道観光の発展に少しでもお役に立てれば幸いです。

「満足度向上に向けた観光モデル地域の創出・調査」
民族共生象徴空間（ウポポイ）活用に関する調査報告書

目 次

1. 調査の目的および概要	1
2. 白老町・登別市・苫小牧市の観光の現況	1
2-1 主な観光資源	
2-2 観光入込の現状	
2-3 交通アクセス	
3. ウポポイの概要	6
3-1 整備概要	
3-2 運営概要	
4. 観光対象としてのアイヌ文化	7
4-1 北海道におけるアイヌ文化展示等施設	
4-2 アイヌ文化で地域を彩る阿寒湖温泉街の新たな取り組み	
5. ウポポイ活用の方向性	18
5-1 ウポポイの役割と位置づけ	
5-2 ウポポイ活用のための取り組み	
6. 持続可能な地域経営のための留意点	22
6-1 アイヌ文化の真正性保持のための留意点	
6-2 持続可能な地域経営のための留意点	
6-3 地域災害対策のための留意点	

1. 調査の目的および概要

北海道観光において、地域資源や公共交通機関の利便性、災害時・緊急時対応などの地域観光の現状・課題を踏まえ、目的別観光（SIT）等、新たな観光パッケージの検討を通じて、地域観光の満足度の向上に繋げることを目的とする。

本調査では、2020年4月に供用を開始する民族共生象徴空間（以下、「ウポポイ」と称する）を契機として、白老町・登別市・苫小牧市3地域における観光の満足度向上およびアイヌ文化を正しく伝え観光施策と結びつけた北海道観光のさらなる魅力向上のための方策について検討を加えた。

本報告書は6章の構成で、本報告書の主目的であるウポポイを契機とした活用の方向性は5章に掲載し、2-4章部分は関連基礎情報を整理した。またもう一つの目的である災害時・緊急時対応や持続可能な観光資源としてのアイヌ文化の位置づけに関しては、地域経営の視点から留意点として整理し6章に整理した。

2. 白老町・登別市・苫小牧市の観光の現況

2-1 主な観光資源

3地域の主な観光資源を表1にまとめ、以下にそれぞれの観光資源の特徴をまとめる。

(1) 白老町

白老町はウポポイが整備される中核的地域として位置づけられる。特にアイヌ関連資源では旧アイヌ民族博物館が立地していたこともあり、他地域と比べると充実している。今年4月にウポポイが供用を開始することでさらなる充実が期待される。また従来から体験型観光も盛んにおこなわれており、「体験工房コロポックル」は様々なアイヌ文化の体験メニューを提供している。さらに食の面でもブランド食材である白老牛やたらこ、アイヌ伝統料理等の提供も行っている。

(2) 登別市

登別市は登別温泉が全国有数の温泉地として有名であり、また人気のテーマパークもあり、恵まれた観光資源を有している。一方「登別ゲートウェイセンター」の事業に見られるように、地域の自然資源を活用したガイドツアーや体験観光を活発に進めている。また「知里幸恵銀のしずく記念館」を始めとしたアイヌ文化関連施設も充実している。

(3) 苫小牧市

苫小牧市は工業都市としてイメージされているが、樽前山やウトナイ湖といった自然資源にも恵まれている。特に白老町に隣接する西部地域には樽前ガローや錦大沼公園の高規格オートキャンプ場等のアウトドア関連施設が立地しており、白老町との連携といった面でも期待できる。

表1 白老・登別・苫小牧における主な観光資源(観光行動の3要素別)

	白老町	登別市	苫小牧市
遊ぶ (観光対象、レクリエーション)	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台藩白老元陣屋跡資料館 ・ポロトの森キャンプ場 ・ポロトの森インフォメーションセンター ・インクラの滝 ・倶多楽湖 	<ul style="list-style-type: none"> ・地獄谷、大湯沼、オロフレ峠、クッタラ湖 ・登別市ネイチャーセンター・ふおれすと鉱山、アウトドア・レクリエーション ・登別ゲートウェイセンター、各種ガイド付きツアー ・登別伊達時代村 ・登別マリンパーク・ニクス ・のぼりべつクマ牧場 ・登別オフロードパーク ・登別ホースパーク ・カルルス温泉サンライバスキー場 	<ul style="list-style-type: none"> ・樽前山 ・ウトナイ湖 ・樽前ガロー ・錦大沼公園(オートキャンプ場・青少年キャンプ場) ・道の駅ウトナイ湖 ・海の駅ふらっとみなと市場 ・苫小牧市科学センター ・イコロの森 ・ノーザンホースパーク
遊ぶ (アイヌ関連)	<ul style="list-style-type: none"> ・ウポポイ ・体験工房コロポックル ・チキサニ ・荒井工芸館 	<ul style="list-style-type: none"> ・知里幸恵銀のしずく記念館 ・登別市郷土資料館 ・登別文化交流館 ・カント・レラ 	
遊ぶ(食)	<ul style="list-style-type: none"> ・白老牛 ・たらこ ・椎茸 ・たまご ・にじます料理 ・アイヌ伝統料理 ・バーガー&ベーグル等 	<ul style="list-style-type: none"> ・登別閻魔やきそば 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほっき関連料理
移動する	<ul style="list-style-type: none"> ・JR ・バス(路線、シャトル、貸切) ・レンタサイクル 	<ul style="list-style-type: none"> ・JR ・バス(路線、シャトル、貸切) 	<ul style="list-style-type: none"> ・JR
休む	<ul style="list-style-type: none"> ・白老温泉、虎杖浜温泉 ・ポロトの森キャンプ場 	<ul style="list-style-type: none"> ・登別温泉、カルルス温泉 	<ul style="list-style-type: none"> ・オートリゾート苫小牧(キャンプ場)

2-2 観光入込の現状

3地域の2018年の観光入込客数は、白老町が1,505千人、登別市が3,783千人、苫小牧市が1,995千人であり、この地域の観光入込客総数の約半数を登別市が占めている。また観光入込客数の推移をみると、白老町は減少傾向、苫小牧市は微増傾向、登別市は2011年に大きく減少したものの以降は増加傾向を示している。(図1)

月別観光入込客数では、登別市と苫小牧市の両市が共通して8月が最も多く、次いで7月が続いているが、白老町は6～9月がほぼ同水準となっている。また冬季の観光入込客数では、白老町、苫小牧市は夏季の半分程度に落ち込んでいるが、登別市は10月から3月まで第二のピークを形成している。(図2)

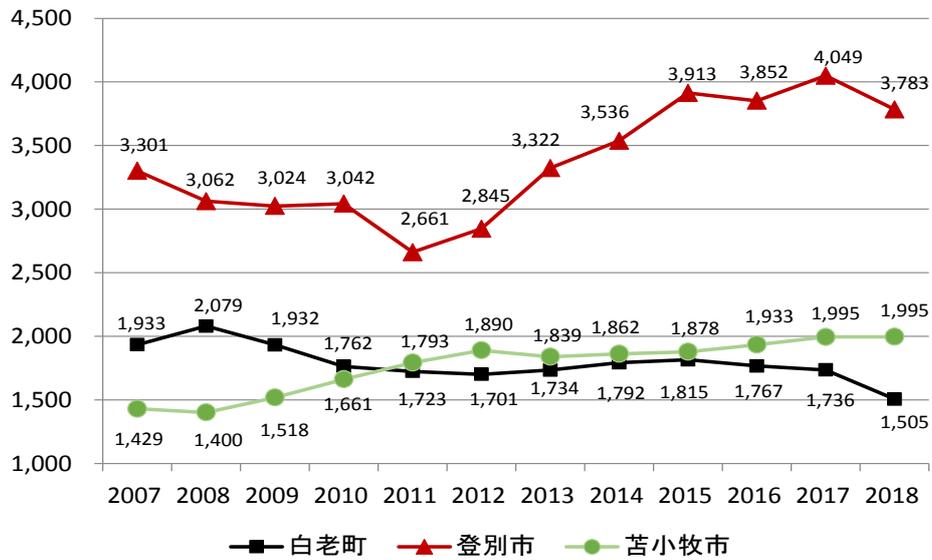


図1 白老・登別・苫小牧における観光入込客数の推移(単位:千人)

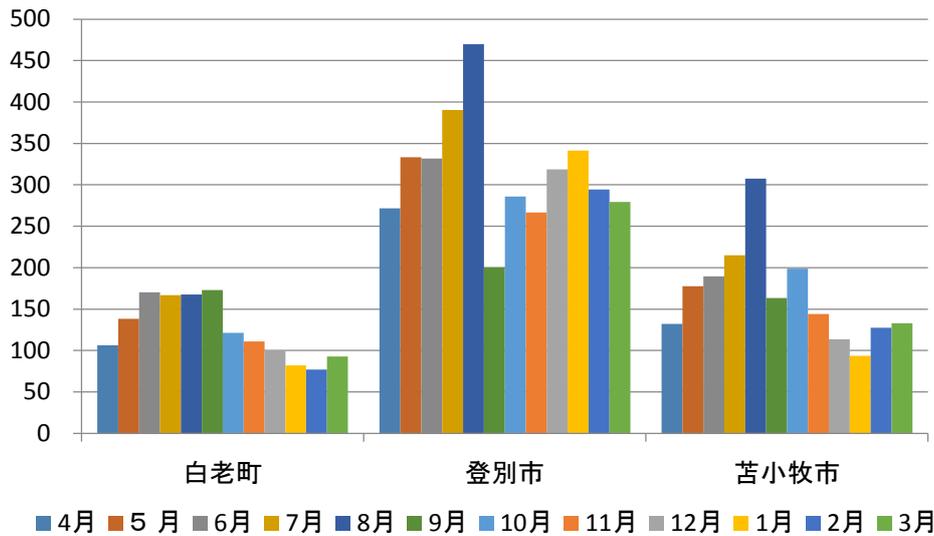


図2 白老・登別・苫小牧における月別観光入込客数(2018年、単位:千人)

外国人宿泊客数をみると、2018年は白老町が11,815人泊、登別市が485,892人泊、苫小牧市が35,870人泊と、登別市での宿泊が圧倒的に多い。しかしながら2007年と2018年を比較すると、白老町は約101.8倍、登別市は2.5倍、苫小牧市4.0倍で突出して白老町の増加が著しいが、すべての地域で増加している。(表2) また、国・地域別で見ると、白老町では中国と韓国、登別市では中国と台湾、苫小牧市では台湾と香港からが多く、地域毎に外国人宿泊客の国・地域構成が異なる特徴を持っていることがわかる。(図3)

表2 白老・登別・苫小牧における
外国人宿泊客数の推移(単位:人泊)

年	白老町	登別市	苫小牧市
2007	116	197,711	10,331
2008	690	210,228	11,418
2009	24	177,346	10,186
2010	42	221,524	13,436
2011	0	154,264	4,833
2012	351	210,710	9,358
2013	807	314,506	22,595
2014	1,317	372,555	21,404
2015	2,836	470,502	37,994
2016	5,611	479,856	39,056
2017	11,131	518,936	40,256
2018	11,815	485,892	35,780

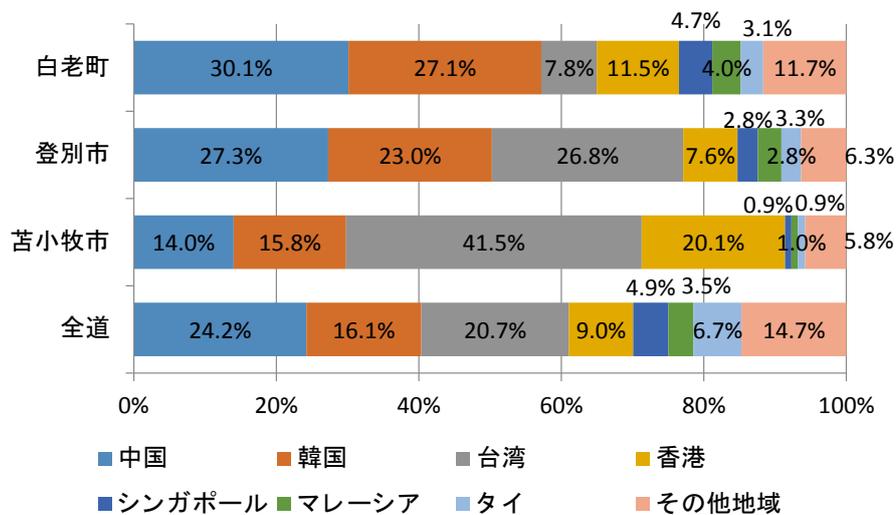


図3 白老・登別・苫小牧における訪日外国人 国・地域別構成比

また旧アイヌ民族博物館の入館者数の推移では、1991年の871,621人をピークにそれ以降は減少傾向が続き2011年に144,683人まで落ち込んだものの、以降は微増で推移し、2014年には188,891人まで回復している。(図4) 公益財団法人アイヌ民族文化財団によれば、月別の来館者数は6月、9月、10月が多いとのこと、これは修学旅行等の教育旅行の団体入館者が多いことが原因として考えられる。

一方外国人観光客の来館者数は、2011年から増加傾向を示しており、2014年には

69,136人に達し、日本人を含めた全来館者数の36.6%を占めるに至っている。国・地域別では台湾・韓国・シンガポール・タイが大半を占めているが、特にタイからの観光客の増加が著しいとのことである。

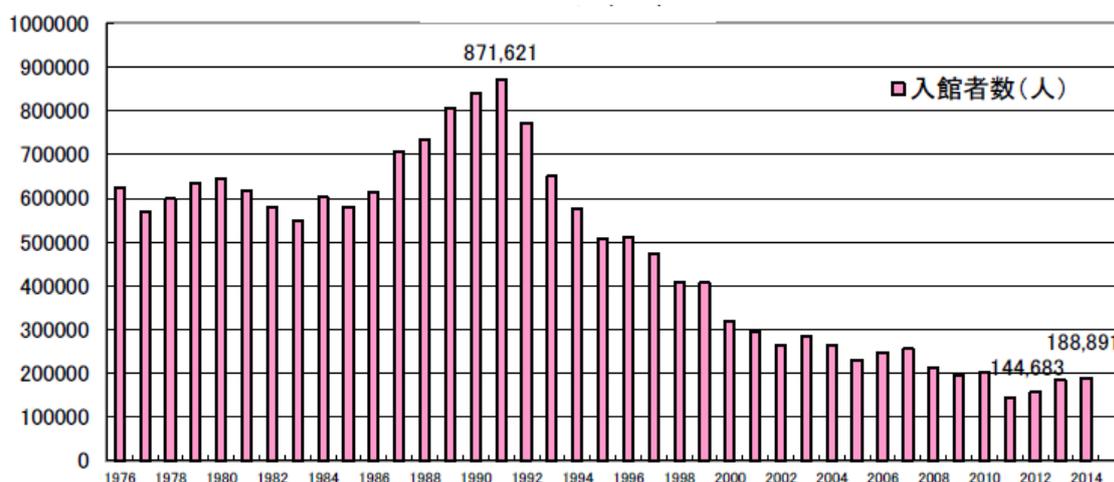


図4 旧アイヌ民族博物館における入館者数の推移

(「白老町観光振興計画(2018年)」より転載)

2-3 交通アクセス

3地域はいずれもJR特急の停車駅となっている。ウポポイ開業時には白老駅に停車する特急本数の増加もあり利便性は一層高まる。また最近レンタカーを利用した、いわゆるドライブ観光需要が高まっているが、片側2車線の道央自動車道が札幌～新千歳空港～室蘭間を結び、人口集積地札幌や北海道観光のゲートウェイである新千歳空港からのアクセスが容易であることや今後世界遺産登録が期待されている「北海道・北東北の縄文遺跡群」を形成する噴火湾エリアへも高速道路・国道・主要道道、鉄道も通じており、交通アクセスの面では北海道内においては恵まれた地域である。ただ将来的に札幌まで北海道新幹線が延伸した場合、在来線の特急本数や停車駅等減少等の可能性もあり、現在の公共交通のサービスレベル維持の点で不透明性があることが課題となっている。



図5 交通アクセスの現状（「白老観光振興計画書」より転載）

3. ウポポイの概要

3-1 施設概要

ウポポイは図6に示すように、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設の3つの主要施設で構成されている。このうち一般観光客の対象となるものは国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園である。

国立アイヌ博物館は「アイヌの歴史や文化を正しく学び、正しく理解する機会を提供するため」の屋内型静的展示施設であり、アイヌ全般に関する情報を子供にもわかりやすい展示を進めるとしている。国立民族共生公園は、公園内に体験交流施設や工房等を配置し、アイヌ文化に関する様々な体験ができる屋外型の動的展示施設として位置づけられる。また伝統的コタンを再現したゾーンも設置され、アイヌ文化を衣食住の観点から体験できる施設構成となっている。

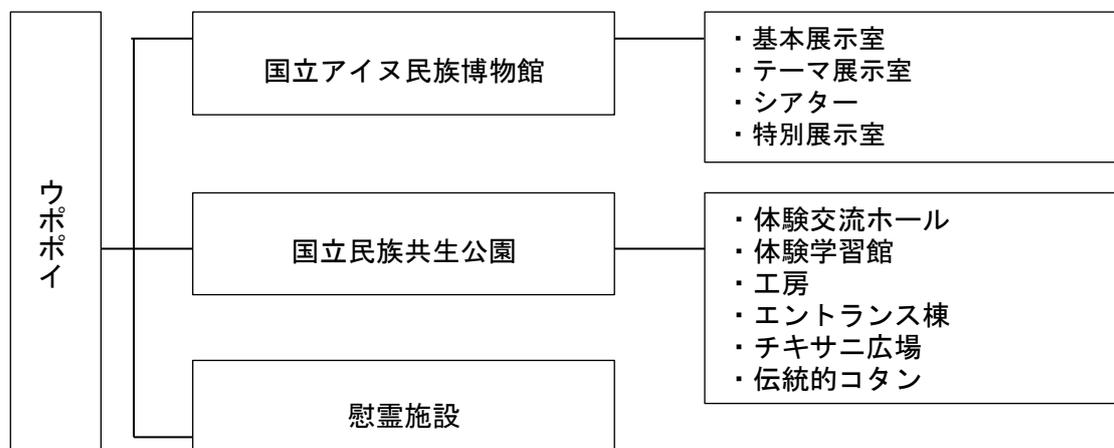


図6 ウポポイの主要施設構成

3-2 運営概要

施設運営にあたっては図7に示すように、既述の主要3施設の管理の他、文化伝承・人材育成活動、体験交流等のプログラム運営に関する取り組みも掲げている。来場者に提供されるプログラムの詳細（内容等）は本報告書調査時点（2019年10月8日）では明らかにされていないが、施設概要によれば体験学習館ではアイヌ料理の調理や食事体験、工房ではアイヌの木彫・刺繍・織物等の体験内容が掲載されている。また体験交流ホールでは、旧アイヌ民族博物館でも行われていたようなアイヌ古式舞踊を通して、観客との直接的交流の機会が想定されている。

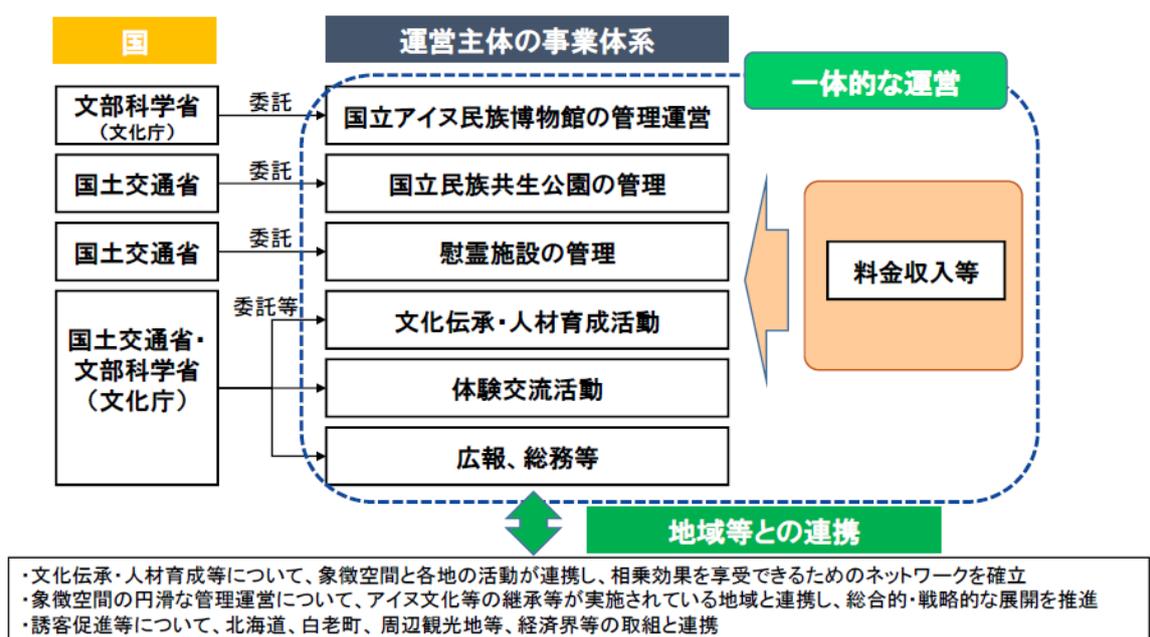


図7 ウポポイの運営体制（「国立民族共生象徴空間の整備等について」(国土交通省)より転載)

4. 観光対象としてのアイヌ文化

4-1 北海道におけるアイヌ文化展示等施設

互恵的共生のあり方とともに地域振興に寄与することを目的とする北海道大学アイヌ先住民研究センターに所属する北原氏の著書によれば、北海道を6つのエリアに整理し、アイヌ文化を紹介している。6つのエリアとは、白老、二風谷を中心とした日胆エリア、釧路、阿寒、十勝を中心とした道東エリア、有珠、室蘭、八雲、洞爺湖を中心とした噴火湾エリア、上ノ国、松前、函館を中心とした道南エリア、網走、稚内、枝幸を中心とした宗谷エリア、旭川、札幌を中心とした道央エリアである。以下、エリアごとのアイヌ文化に関する特徴とアイヌ文化展示等関連施設をまとめる。

(1) 日胆^{にったん}エリア（白老町、平取町二風谷）

北海道の中央南部に位置する日高山脈から西側の太平洋に沿って広がる日高地方と胆振地方を合わせ日胆と呼ぶこのエリアは、北海道の中でも比較的温暖な気候である。同エリアは、ウポポイをはじめアイヌ文化に触れることができる施設が多く、文化の伝承や普及活動が活発に行われている。日胆の中央に位置する白老では、アイヌ民族が四季折々の海の幸をとる生活を中心としていたが、コタンが当時の街道や線路の沿線にあったため、明治以降の交通の発展とともに多くの観光客が訪れることができた地域でもある。

表3 日胆エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
展示施設	かやのしげる 萱野茂 二風谷 アイヌ資料館 (平取町二風谷)	二風谷生まれのアイヌ文化研究者萱野茂氏が生涯通じて収集したアイヌの民話・民具などの工芸品・衣服等が展示されている。室内展示だけでなく、伝統家屋チセの屋外展示も充実している。口承文学の録音も聞けるなど、展示品中の202点が国の重要有形民族文化財指定のものである。
展示施設 体験施設	平取町立 ^{にぶたに} 二風谷アイヌ文化博物館 (平取町二風谷)	民具中心に展示する「アイヌ」、精神世界を伝える「カムイ」、農耕や狩猟の「モシリ」、アイヌ文様の「モレウ」と4ゾーンにわけた屋内展示が特徴。屋外にはチセの展示がある。映像資料も豊富。展示品中の919点が国の重要有形民族文化財。木彫や刺繍の体験も実施。
展示施設 体験施設	沙流川歴史館 (平取町二風谷)	沙流川流域には先史時代から人々が暮らし、コタンが形成されてきた歴史的背景から、このエリアは「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」として国の重要文化的景観に指定されている。ここでは、沙流川の歴史や平取町内から出土した遺物や発掘調査の様子が展示されている。広大な二風谷散策のために無料貸し出し自転車もある。
展示施設	旧マンロー邸 (平取町二風谷)	スコットランド出身の医師で人類学者のニール・ゴードン・マンロー氏は、晩年、二風谷に移住しながら診療所を構えアイヌ文化を研究。特にイオマンテなどの信仰儀式記録映像が有名。5-10月のみ見学可能だが予約制。
展示施設 販売施設	二風谷工芸館 (平取町二風谷)	平取町のアイヌ文化振興の拠点施設「平取町アイヌ文化情報センター」内にある地元工芸家の作品を展示・販売する。アイヌ関連書籍もおいている。
販売施設 見学施設	北の工房つとむ (平取町二風谷)	明治時代の名工の1人であった工芸家の父のもと、二風谷で生まれ育った貝澤徹氏の工房。徹氏が製作する精巧かつアイヌ文様な作品は、多数にわたり北海道知事賞を受賞している。
宿泊施設	民宿チセ (平取町二風谷)	アイヌのご夫婦が経営する民宿。北海道ならではの食材をいかしたアイヌ伝統料理が堪能できる。
体験施設	体験工房 コロポックル (白老町)	白老で木彫り、アイヌ刺繍、ムックリ制作、アイヌ料理、ポロト湖散策など、多彩な体験メニューを古くから提供している。ただし、すべてのメニューが予約制である。
展示施設	登別市郷土資料館 (登別市)	昔の生活道具やクッタラ火山の噴火で炭化したトドマツなどの自然史資料などを展示している。アイヌ語学者 知里真志保氏の「アイヌ神話集」関連資料のほか、サケの皮で作られた靴など様々なアイヌ生活道具の展示がある。

展示施設 体験施設	登別文化交流館カ ント・レラ (登別市)	アイヌ語で「天空」を意味するカント、「風」を意味するレラは、中 学校を再生した施設である。登別市内で出土した土器や石器の展示 のほか、月1回で、縄文蒸しパンづくり、縄文ハンターといった縄 文文化や考古学をテーマとした体験プログラムも実施している。
展示施設	知里幸恵 銀のし ずく記念館 (登別市)	口伝えに受け継がれてきたアイヌ文化を文字で残したアイヌの知里 幸恵氏の遺品や資料などが展示されている。
展示施設	苫小牧市美術博物 館 (苫小牧市)	苫小牧の文化を知ることができる歴史的資料や芸術品を収蔵。アイ ヌの装飾品や衣装、丸木船が展示されている。
展示施設	様似郷土館 (様似町)	アイヌと共に様々な公営事業を実施した矢本家の古文書など様々な 資料が展示されている。
展示施設	シャクシャイン記 念館 (新ひだか町)	真歌公園内にあるシャクシャイン城跡に作られた記念館。コタンの 再現や資料室には、様々な生活道具が展示されている。
展示施設	新ひだか町アイヌ 民族資料館 (新ひだか町)	シベチャリチャシ跡出土遺物や口承文芸の映像資料などが展示され ている。

(2) 道東エリア(釧路市、阿寒町阿寒湖温泉、十勝地方)

日高山脈や大雪山系の山々によって西と北に隔てられた十勝地方であるが、山中に行き
来しやすいルートを見つけ出したアイヌは、空知、上川、北見、広尾にもアイヌ文化を展
開していた。一方、近代以前の阿寒は、小規模な集落が点在し、釧路などの沿岸部と北見、
美幌の要素を併せ持つアイヌ文化が展開されていたが、1934年、この一帯が国立公園
に指定されたことを機に、阿寒湖畔を中心に豊かな自然や温泉を活用した観光産業が盛ん
となった。特にアイヌが経営する商業エリア一帯を「阿寒湖アイヌコタン」と呼ぶ。十勝
や阿寒では、アイヌの伝統芸能や語り部といった口承文芸が盛んに発信されているエリア
でもある。

表4 道東エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
展示施設 体験施設 民芸品店 飲食店	阿寒湖アイヌコタン (阿寒湖温泉)	アイヌの民芸品店など数十件がつらなる知名度が高い代表的 なアイヌ文化スポット。店または工房と住まいが一体となっ ているため、アイヌの暮らしが垣間見られるほか、木彫りや 刺繍の体験が可能。季節の祭事なども見られる。
劇場 体験施設	阿寒湖アイヌシアター イコロ (阿寒湖温泉)	アイヌ古式舞踊、イオマンテの火まつりなど、阿寒に伝承さ れるアイヌの伝統芸能や新しい芸術に触れることができる劇 場。古式舞踊などの体験もできる。
飲食店	アイヌ料理・民芸喫茶 ポロンノ (阿寒湖温泉)	アイヌが日常的に食べてきた料理の数々が楽しめる店。阿寒 の山野でとれた季節の山菜や野菜、鹿肉や魚などの素材を使 用。代表的メニューは、汁物のオハウ。

展示施設	弟子屈町屈斜路コタン アイヌ資料館 (弟子屈町)	屈斜路湖南岸にある資料館。アイヌに関する資料が5つのテーマにわけ450点展示されている。
展示施設	帯広百年記念館 (帯広市)	展示や講座、観察会などのプログラムを実施。特に十勝アイヌの狩猟や植物採集、食生活、衣服、住まい、世界観、信仰などに焦点をあてた展示施設。
展示施設 体験施設	アイヌ民族文化情報センター (帯広市)	帯広百年記念館でのアイヌ文化展示を見て湧いた興味や疑問を探究できる場所として、記念館の一室に開設。専門書、民族絵本、DVDなどの視聴覚素材を用意。アイヌの子どもの遊び、ムックリ演奏、鹿笛工作などの体験観光が可能。
展示施設 体験施設	帯広市生活館 (帯広市)	アイヌの文化や暮らしの伝承に関する事業を行う場所。歌、舞踊、儀式、工芸の伝承活動、企画展示や講演、フォーラム、アイヌ語教室、古式舞踊発表なども実施。
展示施設	幕別町蝦夷文化考古館 (幕別町)	白人コタンのアイヌ指導者吉田菊太郎氏が収集した先祖たちの遺物を展示している。総計626点。
展示施設	釧路市立博物館 (釧路市)	同館の4階にアイヌ文化をテーマにした「サロコペ（アイヌ英雄叙事詩）の人々」という常設展示がある。道東を中心としたアイヌの歴史や文化についての資料がある。
展示施設	幕別町蝦夷文化考古館 (幕別町)	アイヌ運動家のリーダー吉田菊太郎と後継者等により収集された十勝アイヌの刀、盃、衣類、宝物、写真などが展示。
歴史的スポット	ノッカマップ岬 (根室市)	アイヌの近世最後の戦い「クナシリ・ナメシの戦い」(1789年)に関して松前藩が首謀者37名を処刑した場所。毎年9月にイチャラバという慰霊祭が行われている。

(3) 噴火湾エリア（伊達市有珠町、室蘭市、八雲町、洞爺湖町）

渡島半島に周囲を囲まれた円形の噴火湾内には、縄文遺跡群の遺跡が数多く残っており、洞爺湖町ではアイヌが作ったと見られる畑の畝が確認されている。近世になると、ユーラップ、ウスなどのアイヌ集落が知られ、クジラやオットセイ漁など海民の誇りが受け継がれてきたエリアである。また同エリアでは、1904年、アイヌの子弟を対象とした当時唯一の中等教育機関「虻田学園」が設立された歴史を持つ。

表5 噴火湾エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
展示施設	有珠モシリ遺跡とだて 歴史文化ミュージアム (伊達市)	形質人類学が、縄文人の形質が近世のアイヌに受け継がれていることを説くことから、続縄文期の祭祀具として出土されたクマの彫刻とアイヌのクマ信仰との関わりについて学べる施設。
展示施設	洞爺湖町立入江・高砂貝 塚館 (洞爺湖町)	噴火湾を望む高台に2つの貝塚展示施設が連なる。入江は縄文前期から後半。高砂は縄文後期から擦文、近世アイヌ期の遺跡。縄文→続縄文→擦文→アイヌ期から近代までの噴火湾の成り立ちが紹介されている。
展示施設	室蘭市民俗資料館 (室蘭市)	港町として発展してきた室蘭を4つのテーマで体系的に紹介する資料館。アイヌ民具や縄文などの郷土資料が約3万点が収蔵された展示施設。
展示施設	昭和新山アイヌ記念館 (壮瞥町)	記念館全体が再現したチセである。儀式用の道具や生活用品が展示され、アイヌの暮らしぶりが理解できる。

展示施設	八雲町郷土資料館。木彫り熊資料館 (八雲町)	八雲アイヌの歴史が学べる資料館。併設されている木彫り熊資料館では、木彫りクマの原型や作品が多数展示されている。
------	---------------------------	---

(4) 道南エリア (上ノ国町、松前町、函館市)

先史以来この地に住んでいたアイヌの先祖達は、船を用い、津軽海峡を本州との交易交通路として利用していたことから、江差や松前の海岸沿いにも集落を構えるようになった。しかし14世紀以降、和人がこの地を往来するようになり、「道南十二館」と呼ばれる堅固な砦が15世紀に各地に築かれた。また交易の主導権を求めコシヤマインなどの戦いを経て、和人が定住し始め和人の主導権が決定的になっていった。江戸時代には和人の地として蝦夷地支配の拠点となっていった。道南エリアは、アイヌにとって交易と戦いの歴史的特徴を持つ地である。

表6 道南エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
歴史的スポット	勝山遺跡と 夷王山墳墓群 (上ノ国町)	日本海を見下ろす夷王山のふもとに松前藩の始祖武田信広が築いた山城。(1470年)山城の背後には600を超える古墳群があるが、一部アイヌのものもあることから、戦いの後に両者が混在していた事実の証として注目を集めている。
歴史的スポット	<small>しのりたてあと</small> 志苔館跡 (函館市)	道南には12の和人の館があったと言われているが、ここはその1つ。
展示施設	函館市北方民族資料館 (函館市)	旧日本銀行函館支店の建物を活用して誕生した当館は、学者や開拓者等によって収集された貴重な資料を展示している。特に、馬場脩氏ら学者が収集したアイヌ資料は、多くの研究機関が紹介するほど貴重な資料である。
展示施設	松前城資料館 (松前町)	青森県八甲田山で起きた陸軍の雪中行軍遭難事故の際に、八雲 <small>べんかいたこじろう</small> アイヌの弁開風次郎氏が隊長をつとめ9人のアイヌが救助に向かったという歴史があるが、その弁開氏の関係資料が展示されている。

(5) 宗谷エリア (網走市、稚内市、枝幸町)

古くからこの地は、樺太アイヌや大陸の人々との交易の地として知られ、蝦夷錦に代表される産物が行き来し、宗谷アイヌが交易の中心としての役割を果たしてきた。宗谷から約43キロに位置するサハリンは今や国境の地であるが、かつては宗谷アイヌや樺太アイヌが海のアイヌとして行き来していた交易の地である。

表7 宗谷エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
展示施設	北海道立北方民族博物館 (網走市)	アイヌ文化は、北方ユーラシアなどとも深い関わりを持つことから、アイヌと北方諸民族との関わりを幅広く学ぶことができる民族博物館。衣食住から生業、交易、精神文化など豊富な実物資料により解説がされている。
展示施設	稚内市北方記念館 (稚内市)	同館のアイヌ文化のコーナーには、樺太や宗谷アイヌに焦点をあてた特徴的資料が展示している。
展示施設	オホーツクミュージアムえさし (枝幸町)	枝幸では、擦文時代から近世アイヌ期を経た現在まで海洋民族としての暮らしぶりが絶えることがなかった。熊を神聖視したオホーツクアイヌの熊送りの儀式は、復元された竪穴式住居で学ぶことができる。
歴史的スポット	メクマ(樺太アイヌ強制移住の地) (稚内市)	樺太千島交換条約(1875年)によって全島がロシア領になった樺太から、開拓使は漁業で暮らす8百数十人のアイヌを日本国民としてこの地に移住させた地である。
歴史的スポット	稚内バツカイシュマ (稚内市)	抜海港の裏に抜海岩とよばれる高さ30mの岩がある。ここに、アイヌの石人説話の碑や抜海神社がある。

(6) 道央エリア(旭川、札幌)

大雪山系から流れ出る北海道随一の大河である石狩川は、流域に多くの人々の暮らしを育んできた。旭川から少し下った所にある神居古潭は、人が立ち入ることができない難所を意味することから神の世界と考えられ、ここを境に上流域がペニウングル(上手の人)、下流域にパニウングル(下手の人)の世界が作られた。札幌はパニウングルのエリアにあたり、定山溪以外にも、JR桑園駅付近や藻岩山にも集落があった。戦後、道央エリアが都市として成長するにあたり、地方から移り住むアイヌも多く、都市化したエリアでもある。

表8 道央エリアにおけるアイヌ文化展示等関連施設

カテゴリー	施設名・(場所)	特徴
展示施設	旭川市博物館 (旭川市)	2008年の大規模リニューアルを機に、アイヌ史の時空間を大きく拡張し、アイヌを狩猟採取だけでなく、農耕民、職人、交易の民、戦士として位置付け紹介している。また人物模型を用いた生活シーンの再現や、マンガでの解説を取り入れるなどアイヌ世界を身近にふれる機会を創出している。
展示施設	かわむらかねと 川村カ子トアイヌ記念館 (旭川市)	初代館長であった川村氏が先祖から伝承された民具を展示したことから始まった個人博物館であるが、現在は展示品も資料も充実し、約150種300点以上の展示がある。前庭では、火の神の寝床である炉に毎日火が焚かれるチセ(家)がある。祭事などの催しも実施している。
展示施設	旭川文学資料館 (旭川市)	旭川ゆかりの文学者の著作や研究資料を揃えた文学館。アイヌの口承文学『アイヌ神謡集』を翻訳した知里幸恵氏の展示がある。

展示施設 体験施設	札幌市アイヌ文化交流センター 「サッポロピリカコタン」 (札幌市)	「美しい村」という意味のピリカコタンは、歴史資料をみて回る種類の施設ではなく、展示物を手に取りながら、アイヌの生活や文化を学ぶ施設。伝統的な音楽楽器ムックリの製作や刺繍体験もできる。
展示施設 体験観光	北海道博物館 (札幌市)	北海道開拓記念館と道立アイヌ文化研究センターの2施設が統合した博物館。館内は、「アイヌ文化の世界」を含め5つのテーマで展示がある。アイヌ文化に関する講座、楽器に触れるなどの体験もある。
展示施設	北海道大学植物園「北方民族資料室」 (札幌市)	明治期に収集されたアイヌをはじめとした北方民族に関する資料が保存・展示されている。また園内の「北方民族植物標本園」は、アイヌをはじめとする北方民族が暮らしに用いた植物が栽培されている。
飲食店	海空のハル (札幌市)	居酒屋の一角にアイヌ民族博物館監修のアイヌ伝統家屋「チセ」が個室として設置され、アイヌ伝統料理が提供される。チセ内の調度品や料理の皿などもすべてアイヌ民族博物館からの提供品。1日限定8食。利用時間制限付きで予約制。

既述のアイヌ文化関連施設を北海道地図に配置したものを図8に示す。



図8 アイヌ文化施設等の立地状況

4-2 アイヌ文化で地域を彩る阿寒湖温泉街の新たな取り組み

2005年、阿寒観光協会と阿寒湖温泉まちづくり協議会が統合され、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構が設立された。阿寒湖温泉街に暮らす約120人のアイヌとの共生を観光まちづくりの柱の1つに据えた阿寒湖温泉街では、「阿寒湖再生プラン2010」(2002年)を策定した。これにより、国の重要文化財指定でユネスコ世界無形文化遺産に登録された「アイヌ古式舞踊」だけでなく、阿寒湖のシンボルである「まりも祭り」、「千本タイマツ」など、アイヌ文化を体験できるプログラムの導入がすすめられたほか、温泉街の住民がアイヌ文化を学ぶ機会「阿寒アカデミー」(年2回)や「アイヌ文化教育プログラムセミナー」を開催するなど、正しく文化を学ぶ場も設けられてきた。以降、「阿寒湖温泉・創生計画2020」(2011年)、「観光立国ショーケース」(2015年)、「阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト」(2016年)などの事業を経て、地域文化であるアイヌ文化を再度見つめ直し、真正性を追求した「アイヌ文化に彩られた国際リゾート」へと舵を切りだした。

観光まちづくりを主導する立場としてNPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構が日本版DMO(Destination Management Organization: デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション)に認定登録されたほか、プロジェクトの運営主体として阿寒アドベンチャーツーリズム株式会社の中核プロジェクト推進を担うDMC(Destination Management Company: デスティネーション・マネジメント・カンパニー)として設立されている。以下は、アイヌ文化で同地域を彩る新たな主要プロジェクトである。

(1) 阿寒湖の森ナイトウォーク「カムイルミナ」(2019年7月よりスタート)

カナダのマルチメディア・エンターテイメント・カンパニーMOMENT FACTORYによる体験型ナイトウォークで、世界で初めて国立公園の夜の森を舞台に演出されたことから注目をあびた。同作品はアイヌとの共同作品で、阿寒のアイヌに古くから伝わるアイヌ伝説「フクロウとカケスの物語」がベースの自然との共生をテーマにしたものである。参加者が入り口で受け取る杖から流れる音声に導かれ、8つの場面で光と音の演出によるデジタルアートを通してアイヌの神々からのメッセージを受けながら阿寒湖温泉固有の自然に意味をもたらし、五感を通して楽しむことができるアドベンチャー・ショーと融合したプログラムである。(写真) 2019年度の開催期間は、7月5日～11月10日で、日没30分後からのスタートとなるため、月により開始時間と終了時間が異なる。参加費は、大人3,000円(前売2,700円)、小人1,500円(前売1,300円)である。集合場所は、阿寒観光汽船。



出所)
「カムイルミナ」
HPより転載

(2) 阿寒湖アイヌシアター「イコロ」新演目 阿寒ユーカラ「ロストカムイ」

(2019年3月よりスタート)

アイヌ語で「宝」を意味する「イコロ」は、阿寒湖のアイヌ文化の発信拠点を目的とした屋内劇場として2012年にオープンした。場所は、アイヌコタンの中で、前述した森のナイトウォーク「カムイルミナ」の場所とは、正反対に位置する。座席数は332席の他に後部に立ち見席120人が収容可能である。これまでは、古式舞踊や火まつりを中心とした演目だったが、2019年3月より専門クリエイター等とアイヌによる3Dデジタルアートなど最新技術を取り入れた立体感ある新しい世界観の演目「ロストカムイ」が誕生した。ストーリーは、エゾオオカミはかつて狩りをするカムイと呼ばれカムイの中でもアイヌに狩を教えたことから特別なカムイとされてきた。しかし、エゾオオカミは明治時代から減少し、絶滅に至ってしまった。そんなエゾオオカミのカムイをかつてアイヌと共に生きた阿寒の森に再現し、古式舞踊と現代舞踊で表現したものである。

この挑戦により、これまで口承文芸として伝えられてきた叙事詩（ユーカラ）の世界は新たな手法で伝えられることとなった。2019年の公演予定表によれば、新演目「ロストカムイ」は、阿寒湖森のナイトウォークが終了後21時15分からの40分間で、料金は大人2,200円（前売1,980円）、小人600円（前売同料金）である。一方これまでの演目である「古式舞踊」は、繁忙期の5-10月まで1日3回の公演がある他、4-11月は20時15分より30分間「火まつり」が実施されている。



出所)「阿寒アイヌコタン」HPより転載

(3)「阿寒パロコロプロジェクト」の一環 まちなかアイヌアート事業推進プロジェクト

(2018年3月よりスタート)

阿寒湖温泉街では、「阿寒湖温泉再生プラン2010」策定以降、地域一帯のアイヌ文化の保存と情報発信に努めてきたが、近年はこの地域固有の文化主張と同時に景観づくりを掛け合わせた地域のアイデンティティ確立のまちづくりプロジェクトが始まった。そのプロジェクトの1つが、「阿寒パロコロプロジェクト」の一環としてのまちなかアイヌアートプロジェクトである。

まちなかアイヌアート事業推進プロジェクトとは、より魅力的な観光地となる阿寒湖温

泉街行動指針を話し合う「阿寒パロコロプロジェクト」より提案された具体的プロジェクトであり、①地域にストーリー性を植え付ける景観によるアイヌ文化の創出と、②観光客の温泉街回遊を促進すべきアイヌアートの提供、によるアイヌ文化に抱かれた観光地として一貫した印象を底流に据えることを目的としている。

①景観によるアイヌ文化の創出

阿寒湖温泉街は、メインストリート沿いに阿寒湖アイヌシアターイコロがある「阿寒湖アイヌコタン」、宿泊施設が集積する「幸福の森商店街」、エコミュージアムや森のナイトウォークスタート地点の「まりもの里商店街」と3つの商店街エリアが存在し、それぞれアイヌ文化との共存方法が異なる。そこで、商店街単位による地域ビジョンと発信するシンボル、アイヌ文様等を使用した商店街づくりが委ねられた。特に特徴的なのは、アイヌ文様の使用のあり方である。アイヌにおいてアイヌ文様は、地域、信仰、生活、風習などに関わる意味が込められていることから、人が踏みつける場所へのアイヌ文様の使用を禁じるなど一程度ルール化がされている。また、デザイン作成時には阿寒アイヌ文化的所有権研究所に相談することが望ましいとも示されている。これは、アイヌ文様等が単なるデザイン模様の一部として使用されるのではなく、地域固有のアイヌ文化への尊厳と畏敬の念を抱いた利用が義務付けられていることを示す。以下は、阿寒湖温泉街における3エリアの位置・ビジョン・シンボルである。(図9)

<阿寒湖アイヌコタン>

ビジョン・・阿寒湖温泉街におけるアイヌ歴史文化の継承を先導するエリア
シンボル・・コタンコロカムイ（集落の守り神、シマフクロウ）

<幸福の森商店街>

ビジョン・・アイヌコタンに隣接する商店街であることから、訪れる人に浸しやす
い形式でアイヌアートを取り入れていく
シンボル・・コロポックル（蔭の葉の下の人）

<まりもの里商店街>

ビジョン・・阿寒湖温泉の東端からのアイヌ文化の発信と積極的アイヌアートの導入
シンボル・・阿寒湖・マリモ・ヒメマス・ボッケ



図9 阿寒パロコロプロジェクト対象エリア

②観光客の温泉街回遊を促進する
アイヌアート

各商店街にある空き店舗を活用したそれぞれのビジョンとシンボルに則ったアイヌアート活用やストリートファニチャーを点在させ、観光客にアイヌ文化を身近に感じてもらおうと同時に同地域の課題である温泉街回遊を誘発し賑わいを創出させる取り組みが始められた。

前述したアイヌ文様と同様にこのプロジェクトについても、導入イメージや阿寒国立公園阿寒地域管理計画書に定められている色彩を踏まえた配色提案がガイドライン化され、共通認識のもと地域一帯のまちづくりが徹底されている。

図10は、「アイヌ文化を活かした景観デザインの手引き」に掲載されている導入イメージの一例である。



図10 景観デザインの一例

5. ウポポイ活用の方向性

5-1 ウポポイ活用の視点

ウポポイを今後活用していく上で、同施設の機能や役割を考察すると以下の2点に集約される。

- ①アイヌ文化理解へのゲートウェイとしての役割
- ②地域における観光振興のための集客装置としての役割

(アイヌ文化理解へのゲートウェイとして)

ウポポイは「アイヌ文化復興等に関するナショナルセンターとして、アイヌの歴史、文化等に関する国民各層の幅広い理解の促進を図る」こと、そして「新たなアイヌ文化の創造及び発展につなげていくための中心的な拠点」として位置づけられている。すなわち本施設は全国（特に北海道）におけるアイヌ文化コミュニティともいべき広域連携ネットワークの中核拠点、あるいは象徴＝シンボルとしての役割を果たすものとする。別な見方をすれば、本施設が北海道に立地している数多くのアイヌコミュニティや展示・体験施設からなる「アイヌ文化エコ・ミュージアム」のコアセンターとして、あるいはゲートウェイとしての役割を担っているものとする。

こうしたことからウポポイ活用にあたっては、第一にウポポイで知り得たアイヌ文化の基本知識を、さらに深められるような取り組みを進めていく必要がある。取り組みの方向性としては、以下の2点が考えられる。

方向性1：北海道内各地のアイヌ文化施設や史跡等への誘導といった空間的な展開を考慮していくこと

方向性2：アイヌの歴史や世界文化遺産としての登録も期待されている「北海道・北東北の縄文遺跡群」等、アイヌ文化以前の文化との連携。あるいはSDGs（持続可能な開発目標）推進における観光の役割が重視されており、元来自然と共生してきたアイヌの知恵に学び、豊かな未来社会を志向するといった時間的な展開を考慮していくことも必要である

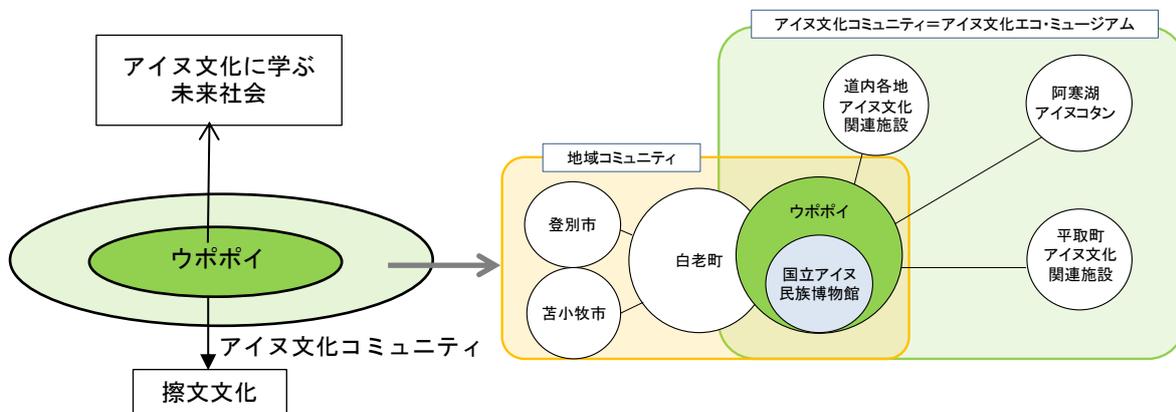


図11 ウポポイ活用の基本的視点(左:時間軸の展開 右:平面軸の展開)

(地域における観光振興のための集客装置として)

ウポポイは国立のアイヌ文化関連施設ではわが国唯一の施設であり、集客効果は大きく、国内外から多数の観光客の来訪が予想される。そのため、アイヌ文化に対する理解が深まり、観光消費の増大による地域経済への好影響が期待される一方、観光客の集中による地域社会や地域環境への悪影響も懸念される。そのためウポポイの集客効果を持続可能な形で地域観光振興につなげていく方向性としては、以下の2点が考えられる。

方向性1：ウポポイと連携することにより地域の自然やアイヌ文化資源を最大限生かした個性的な地域形成を図るとともに、様々な取り組みの成果や恩恵を地域全体でシェアし、アイヌ文化を地域の誇りとして醸成していくといった視点が必要である。

方向性2：集客に固執するあまり、過度な演出等はさけ、あくまでも「観光は手段」として認識し、アイヌ文化の理解を目的とし、地域資源を活かした観光商品づくりを行う。

5-2 ウポポイ活用のための取り組み

ウポポイの活用範囲は多岐にわたるが、本稿では主に観光分野における活用方策に主眼を置いて検討する。

筆者は観光周遊における観光行動は概ね「遊ぶ」、「移動する」、「休憩する」の3要素によって構成され、一連の観光行動はこの3要素があたかもネックレスのように相互につながった構造を有していると考えている。そのため観光地側ではそのネックレスが切れないように、観光客がスムーズな観光周遊が可能となるような環境整備が求められる。

白老・登別・苫小牧地域における観光行動の3要素に対応できる資源（「図表1」参照）および北海道内のアイヌ関連施設等を組み合わせて多様な旅行商品の造成が可能である。本検討ではアイヌ文化の「学び」に着目することにより、観光客の知識的意欲の醸成によるリピート向上に繋げていくこと。またアイヌ文化が北海道固有のものであることから全国他地域との差別化に繋がるものであると考え。

こうしたことからアイヌ文化の理解をより深めるのに効果があるもの、ウポポイとの連携による相乗効果が期待されるもの、そして比較的初期投資が少なくリスクの小さいものを以下に提案する。

(1) 地域内におけるツアー・プログラム例

■シャトルバスを活用した日帰りウポポイガイドツアー

ウポポイ開業に併せて登別温泉とウポポイを結ぶシャトルバス（料金、運行スケジュール等は未定）が運行される予定である。シャトルバスを単なる移動手段としてのみ利用する場合の想定利用者は公共交通機関利用者等に限定される。そのため自動車利用者等がシャトルバスを利用したくなるような付加価値をシャトルバスに加えていくことが望まれる。

そこでアイヌガイドによる日帰りガイドツアーを試行的に実施してみはどうか。ガイドツアー実施のためには、多様なガイドツアーを催行している「登別ゲートウェイセンター」との連携やガイド育成事業を進めていく必要がある。また白老町での活動の多様性を図るため、白老町の株式会社協業民芸が運営する「体験工房コロポックル」との連携も必要である。例えば以下のようなモデルツアーが考えられる。そして参加状況やシャトルバス運行の継続性を評価した上で、将来的にはツアーバスの貸切によるガイドツアーも視野に入れていく。

(半日コース：ガイド添乗、午前・午後各1回催行)

登別温泉→移動（シャトルバス）→ウポポイ→移動（シャトルバス）→J R 白老駅
→ J R 登別駅→登別温泉

(1日コース：ガイド添乗、1日1回催行)

登別温泉→移動（シャトルバス）→ウポポイ→昼食（白老町）→アイヌ民芸体験（体験工房コロポックル）→移動（シャトルバス）→J R 白老駅→J R 登別駅→登別温泉

■ レンタサイクル事業を活用したポロト湖周辺・白老町内バイクツアー

白老観光協会では、2019年に170台の中古自転車を譲り受け、ウポポイ開業に併せてレンタサイクル事業を実施する予定である。本事業を活用し、ポロト湖周辺（自然休養林、水芭蕉群生地等）や白老町内をフィールドとするガイド付サイクルツアーを実施する。事業の進展を見ながら、本格的なロードバイク等を配置し、登別や苫小牧のアイヌ関連施設や景勝地等をめぐり、より広域的なガイド付ツアーの催行も視野に入れる。

■ アイヌ狩猟体験バックカントリーツアー

アイヌの本来のスタイルは狩猟生活である。最近アドベンチャー・ツアーが注目されているが、往時のアイヌの生活では日常生活がアドベンチャーの連続であったと考えられる。ウポポイではアイヌの生活に関する展示は行っているものの、アイヌの狩猟生活の疑似体験を通して、アイヌ文化の理解をより深めることを目的に四季を通じたバックカントリーツアーを試行する。フィールドとしてはウポポイのあるポロト湖周辺、登別温泉近郊の山間部、苫小牧錦大沼公園周辺が適している。ツアー実施にあたっては、アウトドア・レクリエーションに関する様々なガイド事業を実施している「登別市ネイチャーセンター・ふおれすと鉱山」や、白老町の株式会社協業民芸が運営する「体験工房コロポックル」との連携とともに、アウトドアガイド人材育成を進めていく必要がある。

■ 宿泊型“チセ”体験プログラム

ウポポイ内にはアイヌの住居“チセ”が設置され、来場者の見学に供される予定であるが、あくまでの展示物のひとつであり、実際に滞在することはできない。アイヌ文化をよ

り深く理解するためには、実際のアイヌの生活を体験することが効果的である。本プログラムではチセづくりやチセ内での食事等、アイヌの生活を疑似体験するもので宿泊を伴うことから、ウポポイ周辺のキャンプ場が適しているものとする。ポロト湖休養林内のキャンプ場や比較的近い錦大沼公園・青少年キャンプ場が候補に挙げられる。

(チセづくり)

チセづくりにあたっては、有識者の指導を受けながら家族やアイヌ文化に興味のある観光客、教育キャンプに参加する青少年等に参加を募り実施する。チセづくりという共同作業を通して、アイヌ文化を共有する仲間意識が醸成され、いわゆる“アイヌ文化コミュニティ”形成のための基盤づくりにもつながるものとする。また参加のインセンティブを供与するため、例えば参加1回に対してポイントを付与し、貯まったポイントによってチセ完成後、無料・割引宿泊ができるといった仕組みも考えられる。

(チセでの宿泊)

宿泊業界では最近キャンプの一形態である“グランピング”が注目されている。高級リゾート内に自然を身近に感じることができる宿泊形態として、また一部のキャンプ場でも常設の高級テントを設置するなど、全国各地で整備が進められている。

チセでの宿泊はある意味わが国唯一の自然の中でアイヌ文化を体験できるグランピング施設としても位置付けることができる。宿泊にあたってはできるだけアイヌの食事や就寝環境を再現していくことが必要である。

(2) 北海道全域を対象としたツアー・プログラム例

■アイヌ文化の過去や未来に着目したツアー・プログラム

「5-1 ウポポイ活用の視点」でも触れたように、アイヌ文化の歴史を辿ることによって「学び」の対象は大きく広がる。アイヌの歴史をさかのぼれば、縄文文化に繋がるが、世界遺産登録が期待されている「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、北海道では噴火湾沿岸域が対象地域となり、地理的な近接性からも連携が可能であり、アイヌ文化をテーマとした広域観光圏形成が期待される。

一方、SDGs（持続可能な開発目標）推進における観光の役割が重視され、国連観光機関（UNWTO）では、「観光と持続可能な開発目標」を設定し、わが国においても観光推進にあたって行政や観光事業者、一般観光客が今後果たすべき役割を明記している。アイヌは本来狩猟民族であり、自然との共生や自然の中でのコミュニティ形成等で様々な知見を有しているものと考えられることから、未来の私たちの社会の在り方を考える上でのアイヌの「学び」をテーマとしたプログラム提供が期待される。実施にあたっては、アイヌの方々や様々な分野の学識経験者や有識者の協力を得ながら進めていくことが必要である。

■全道的なアイヌ・コミュニティを理解するツアー・プログラム

既述のように、ウポポイは北海道全体のアイヌ文化の情報発信機能を有している。北海道内には平取や阿寒等のアイヌ・コミュニティが存在し、アイヌ社会の現在や未来に対する考え方もそれぞれ異なっている。また道内各地にアイヌ文化を扱った展示・体験施設も数多くあることから、ウポポイ来場者が継続的にアイヌ文化の学びを続けていくための環境整備として、学習機会や各地のアイヌ・コミュニティや博物館を訪れるフィールドワークとしてのツアー等を実施するなど継続的に進めていくことが期待される。アイヌ関係団体や民間企業等で組織している「アイヌ文化周遊ルートづくり協議会」では、ウポポイと全道のアイヌ文化関連施設等を結んだ「ユーカラ街道」の取り組み等もあり、こうした取り組みと連携することにより、効果的な推進が可能である。

6. 持続可能な地域経営のための留意点

6-1 アイヌ文化の真正性保持のための留意点

近年、少数民族の文化への理解や経済的自立を目的として、世界や東アジア各国の少数民族による観光客を対象とした様々な事業が行われている。日本人にも馴染みのあるハワイ・オアフ島の「ポリネシアン文化センター」や、ニュージーランド人口の約15%を占めるといわれているマオリ族によるマオリ・ビレッジの取り組みは成功事例としても紹介されている。しかし大半の地域では取り組みは緒に就いたばかりであり、観光と固有の文化の共存の在り方を試行錯誤のうちに模索しているのが現状である。

いわゆる観光の真正性についてはこれまで様々な議論がされてきた。例えばD. ブースティンは『幻影（イメージ）の時代』（1964年）において、観光客はマスメディアによって仕組まれた「疑似イベント」を体験しているに過ぎないとし、観光は真正性を観光客に提供しているものではないとしている。一方、D. マキヤーネルは『ザ・ツーリスト』（2012年）において、そもそも観光客にとっては対象や体験が「本物」か「偽物」かよりも、いかに「本物らしい」かが重要であるとして「演出された真正性」の概念を導入した。T. コーエンは『創造的破壊』（2011年）において、時間の経過とともに非真正性なものも真正性を帯びるようになる「創発的真正性」という概念を提案している。

筆者等は観光客に対して行われる展示やアトラクション、土産品の販売等の観光事業は真正性を観光客に伝えるための手段であると考え、もちろん事業継続のためには収益を確保することも必要であるが、集客が目的になると、観光客の期待に過度に迎合した演出をほどこし、本来伝えたい固有の文化を誤解されてしまうことも懸念される。第4章で紹介した阿寒湖温泉街では2010年から「阿寒湖再生プラン2010」を進めている。その中でアイヌ文化を体験できる様々なプログラムの導入や地域住民がアイヌ文化を学ぶ機会である「阿寒アカデミー」等の活動を進め、アイヌのみではなく地域住民における理解も深めていくといった活動を続けている。さらに、アイヌの歴史や文化への興味を持ってもらうために現代的な演出を施した「ロストカムイ」等といったアトラクションを観光客

に提供している。こうした阿寒湖温泉街の取り組みはウポポイを活用した本地域の観光とアイヌ文化の共存を進めていく上で参考になるものとする。

6-2 持続可能な地域経営のための留意点

「持続可能な観光」は、観光産業の成長がもたらされる負の影響を軽減する観光の在り方として1990年代に登場した。既述の通り、SDGsを達成していく上で観光は大きな役割を担うことが確認されており、21世紀の観光にとって重要な課題として認識されている。SDGsでは17の目標が掲げられ、環境、経済、社会の調和による持続的な発展を目標としている。

わが国においても、いわゆる“オーバーツーリズム”問題として、観光客の急増が地域の環境・社会等に負の影響を及ぼしている事例が報告されている。本地域では現在のところ、オーバーツーリズムによる問題等は顕在化していないようであるが、ウポポイ開業による集客力の向上により、今後様々な負の影響も懸念される。観光産業は本来、魅力的な観光資源、本地域の場合は希少なアイヌ文化によって成り立っているが、観光客の増加や観光産業の発展によりそれらが破壊されることにもなり、それでは観光を持続的に営んでいくことはできない。

上述のSDGsの開発目標を地域にあてはめると、観光産業がそれぞれの利益を追求していくことは経営の継続性からも重要ではあるが、「地域環境」、「地域経済」、「地域社会」とどう調和し、観光によって得ることができる恩恵をそれぞれがどうシェアしていくかが重要であるとする。別の言い方をすれば、「オルタナティブ・ツーリズム（もう一つの観光）」や「コミュニティ・ベースド・ツーリズム（地域を基盤とした観光）」といった「サステイナブル・ツーリズム（持続可能な観光）」が求められているとする。

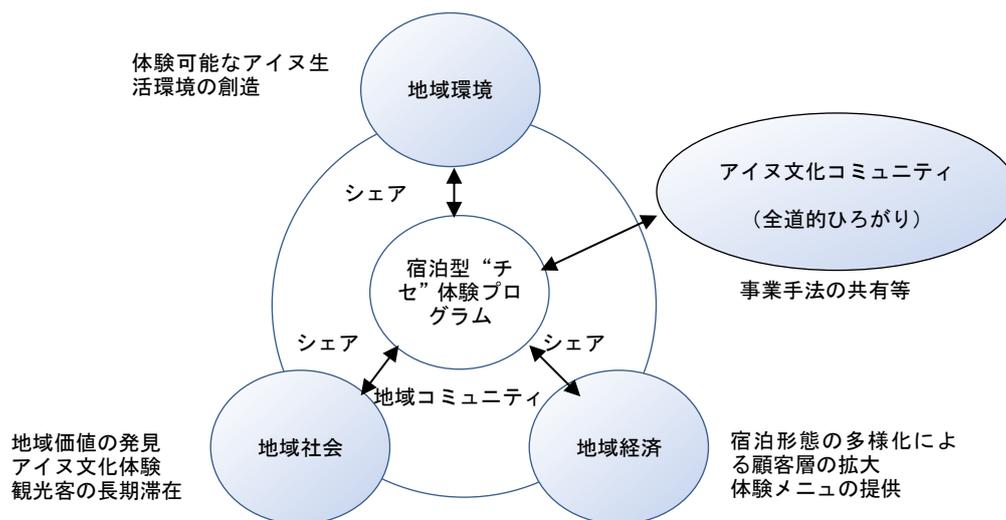


図12 地域とシェアする観光事業のイメージ例
ウポポイ活用の基本的視点(左:時間軸の展開 右:平面軸の展開)

本調査ではいくつかのアイヌ文化理解のためのいくつかのツアーやプログラムを提案しているが、それぞれについて地域コミュニティレベルでは「地域環境」、「地域経済」、「地域社会」や「アイヌ文化コミュニティ（全道的ひろがり）」では「アイヌ文化」との関連性や相互依存性を検証し、事業実施によるメリットをどうシェアできるのかを検証していくことが必要である。

6-3 地域災害対策のための留意点

観光客にとって観光行動の3要素それぞれが期待以上であることや、いわゆる個々の観光行動を結ぶチェーンが切れずに、スムーズな観光周遊を達成できるかが満足度向上に繋がる。そのため行政や公共交通機関、観光関連事業者等は日常的に観光客が快適な周遊ができるための様々な対策を講じている。

しかし2018年9月に起きた「北海道胆振東部地震」では、胆振東部地域で甚大な被害が出た他、北海道全域が数日間に亘って停電するなど未曾有の事態に遭遇した。道内有数の登別温泉地域では、建物の倒壊といった被害はなかったものの、全域が停電し、宿泊施設の停電や公共交通機関の運転休止や道路交通にも大きな影響がでたため、既述の観光行動のチェーンが断絶する結果となった。観光客の大半が滞在している宿泊施設では宿泊客が帰宅不能に陥ったり、観光周遊が困難になる事態が発生した。幸い、スタッフの誘導等により、大きな混乱やけが人も出ず、翌日には観光客の大半が帰宅あるいは観光に出発できたようである。これを教訓として宿泊施設等でも防災訓練等を実施するなど災害時の対策についての検討が進められている。

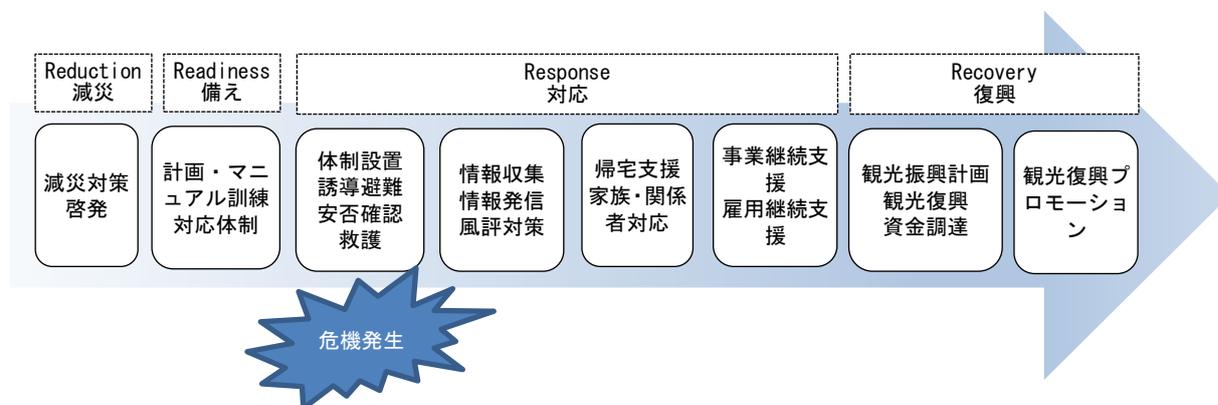
白老・登別・苫小牧地域でも災害対策基本法によって「地域防災計画」が策定され、ハザードマップの作製や避難場所や避難経路が示されているものの、対象は主に地域住民であるのが現状である。すなわち従来の「地域防災計画」ではすべての観光客を守り切るのは困難である。

観光客の特徴は基本的に土地勘がないことに加え、外国人旅行者にいたってはコミュニケーション自体が難しく、災害時の避難が極めて困難となる。日本は世界と比べ、自然災害リスクの高い国である。さらにSARS（重症急性呼吸器症候群）等の感染症やテロの脅威の高まりなど、観光客や観光産業を取り巻くリスクは多様化している。こうしたことから、地域防災計画では対応しきれない観光地の危機管理について検討する必要がある。チェーン化された大規模な宿泊施設では危機管理マニュアルや防災訓練等も高いレベルで実施されているが、一般的な中小規模の宿泊施設では、こうした対応は困難である。そのため、複数の宿泊施設や行政等が連携して、地域の特性を踏まえた「観光危機管理計画」を策定していくことが必要である。

一般に観光危機管理は、以下の4Rで構成されていると言われている。

- ・ **Reduction**（減災：リスクの想定、被害を最小にするための対策）
- ・ **Readiness**（備え：危機が発生した際の具体的な行動マニュアル作成）

- Response（対応：危機が発生したとき、行動マニュアルに基づいて組織的に対応。
混乱や風評による影響を最小限に留めるための情報収集・情報発信）
- Recovery（復興：観光インフラの修復、観光振興のためのマーケティング）



観光危機管理の全体像出典：「観光危機管理ハンドブック」(高松正人)より転載

図 13 イメージ例ウポポイ活用の基本的視点(左:時間軸の展開 右:平面軸の展開)

「観光危機管理計画」策定にあたって特に留意すべき点として、第一に地域毎の特性（自然条件、観光産業形態、観光客特性等）を踏まえることが必要である。第二に土地勘や情報伝達が難しい外国人観光客に対して特段の配慮が必要である。第三に観光客への情報提供や避難誘導に直接携わる現場スタッフの訓練・人材育成が急務である。